

佐久の先人たち④

戦後いち早く福祉事業を進めた町長

かわむら はち ろう  
**川村八郎**

(1881~1961年)



太平洋戦争後の新憲法での住民による直接選挙の第一回統一地方選挙で町長に選ばれ、いち早く社会福祉事業の推進に取り組み、養老施設・知的障がい者施設を開設し、その後も組合立の救護施設を設置した。

正時代にかけて、社会情勢の変化などにもない、合併や閉鎖を余儀なくされていた。このような中で川村は、製糸業をすべて清にまかせて上京した。清は信州明治館と名称を替えていたこの製糸場を昭和時代の廃業に至るまで経営した。

●衆望を担って町長に

日本は一九四五(昭和20)年に太平洋戦争に敗れ、それまでの憲法を改正し、主権を国民とした新憲法を制定した。新憲法の基では、新しく参政権が認められた婦人を含め、二〇歳以上の成人に選挙権が与えられた。

この第一回の白田町の町長選挙が一九四七年四月に行われた。当時の白田町の多くの人々は、川村八郎という町出身の優れた人物が町外にいるのに気が付き、東京在住の川村に帰郷をうながし、町長選挙に立候補してほしいと頼んだ。そして川村はこの選挙で当選して、町長となり二期八年と四か月つとめた。その後川村は、一九五七(昭和32)年四月に、白田町・切原村・田口村・青沼村の四か町村が合併した白田町の町長選挙に当選して、新白田町の初代町長となり一期つとめた。

●町を福祉行政の先進地に

町長になった川村は、全国的にも県下でも早い取り組みである福祉事業に着手し、一九五一(昭和

●製糸工場の経営に関わる

川村八郎は、一八八一(明治14)年に製糸業を営む勝間村(現佐久市勝間)の川村清造と、いゝの間に長男として生まれた。

父清造は白田製糸場と川村製糸場を創業しており、川村は成人すると家業を継ぎ、第一工場の経営をまかされ、第二工場の経営をまかされた弟の清と共に製糸業に勤しんだ。

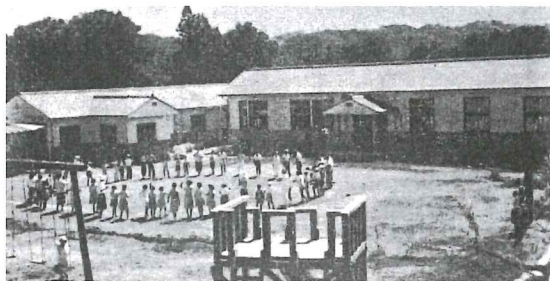
しかし、この地方での製糸場は、明治時代から大

に、特別養護老人ホームも増設された。施設が移転となった旧偕楽園の跡地は老人の学習や保護を目的とした老人福祉センターとなった。

続いて、川村町長は国での法の制定を背景に、知的障がいをもつ子供のための精神薄弱児施設の設定を、議会の強い反対意見のあるなかではあったが進めた。施設は国の認可を受けて町立の白田学園(勝間地籍)として一九五六年に開設され、川村は初代園長になった。

この学園は知的障がい児の学習・生活の指導をして自立自活に必要な知識・技能を教育していくもので、翌年には白田小学校・白田中学校の分室を設け教育施設としての役割も担った。

現在の白田学園は一九八六年一月に北川地籍への新築移転に伴って、一八歳以上の知的障がい者を



白田学園

受け入れる施設として啓明園を併設した。川村町長は白田学園に続き、一九六〇年七月に、身体上・精神上著しい欠陥があるため独立しての日常生活が困難な人に適切な生活扶助を行う救護施設清和寮(勝間地籍)の設置を、近隣町村に呼び

掛け組合立として開設させた。

この施設は、一九八〇年九月に白田学園近くの北川地籍へ新築移転となり、規模も拡大され勝間園を運営する佐久広域連合が業務を引き継いだ。



清和寮

●「福祉の町」と称される

川村町長が早い時期に始めた老人福祉・児童福祉・障害者福祉・生活保護等の事業は、農村医療の佐久総合病院との連帯で一層充実・進展し、社会全般でいよいよ福祉事業が必要とされるようになって、川村町長の先見の明が讃えられるとともに、白田町は福祉の町と言われ評価を高めた。

そのほか、特筆すべき事業には水害の被害を防ぐための片貝川放水路の開削等があるほか、郡の町村会長の要職にも就くなど地方自治に貢献した。

また、川村は漢詩の書籍『千羊詩稿』を残したり、上京中の生活では得意の書で展覧会に入選したとの話も残す文人でもあった。

川村家の裏の勝間城跡の空堀にある道をステッキを持ちながら、役場へ通っていた好々爺という印象の川村町長の姿が懐かしく思い出される。

(丸山正俊)

26)年には、町の財政は厳しいといわれたなか、多くなってきた生活保護を受けている老人の救済を目的に、補助事業で養老施設建設に着手した。

この養老施設偕楽園(下小田切地籍)は「身体・精神・環境・経済的等の理由で、家庭で養護を受けられない老人、寝たきりの老人の入所施設」として二月に開園となり、川村は園長を兼務した。

この園長の考え方が『白田町公民館報』の一九五二年二月号に次のようにある。「養老院はこの世から見捨てられた者がいる所と考えられたりしているがそつではなく、これまで社会のために力を尽くしてきて、身寄りをなくしたり貧しくなった人たちの「長い間ご苦労様でした」と休んでもらう



老人ホーム偕楽園全景

「休憩場」である」と、人々に福祉についての認識を深めてもらうべく述べているのである。

その後の時代は福祉施設の建設など当然と考えられるようになったが、この福祉事業への川村町長の考え方は当時としては非常に先進的なものであったのである。



下小田切の白田老人福祉センターの庭に建つ「川村八郎(千羊)の漢詩碑」

○参考文献

白田町『白田町勢要覧』

一九六九・一九七四・一九七八・一九七九

白田町公民館『公民館報つすだ』第二集 旧白田町編

一九七八

白田町誌編纂委員会『白田町誌』近現代編 二〇〇九